

第20回 富山県生涯学習審議会の議事録

- 1 日時 平成20年12月19日(金) 13:30~15:30
- 2 場所 県民会館304号室
- 3 出席委員 中西会長、新井副会長、麻畑委員、磯野委員、板倉委員、稲葉委員、鹿熊委員、経田委員、竹内委員、中屋委員、七澤委員、西出委員、畠委員、堀委員、村上委員、和田委員、渡邊委員
- 4 議題
 - (1) 報告事項
 - ・生涯学習振興方策についての国の動向について
 - ・本県の生涯学習施策の概要等について
 - (2) 協議事項
「新しい時代における生涯学習のあり方を考える」
 - ・本県の広域学習圏について
 - ・生涯学習を担う人材育成について
 - ・学習成果が地域に還元される環境づくりについて
 - (3) その他

(提出資料について事務局が説明)

<議事>

(会長)

事務局から国の動向についての説明があったが、まず、このことについて、補足や留意点があればお願いしたい。

(委員)

ただ今、事務局の方で資料に基づき詳しい説明があったが、なんと言っても、教育基本法の中に生涯学習の理念が規定をされたということである。行政の組織の中では、文部科学省は生涯学習局という局を作り、それを筆頭局に位置づけたり、市町村でも、生涯学習を推進するために生涯学習の部局を作ってきてはいるが、生涯学習とは何かということについての法的な規定はなかった。過去に生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に対する法律を作るときには、生涯学習は何かということの規定すべきかどうかという議論はあった。しかし、結局、言葉の上でなかなか規定できないということや、規定をするのがいいのかどうかという問題もあって、その目的規定はなく、各都道府県に生涯学習審議会を置けるとか、そういう組織上のことが規定されただけであった。それが今回、教育基本法第3条に生涯学習の理念というものが規定され、生涯学習を推進していくうえでの方向性が明確になってきた。その規定に基づき、中央教育審議会の答申では、生涯学習の理念に照らして、学んだことを生かしていく、知の循環型社会の構築が言われている。

生涯学習を推進していくうえで、社会教育主事、公民館主事、図書館司書などのいろいろな資格というものが重要になってきているわけだが、それらの資格を法的に明確にしたということだ。従来から社会教育と生涯学習とはどのような関係にあるのかということについて議論があるが、社会教育というのは、公民館など社会教育施設が実施する

ものだけを意味するわけではなく、それより広く、地域などにおいていろいろなところで行われるものも含むのである。ある程度組織性をもったものを核としながら、さらに広い意味での生涯学習を推進していくということが法的に規定された。また、図書館司書などの資格は国家資格ではあるが、生涯学習指導員など、国家資格ではない資格も多く設けて、生涯学習を推進していこうとする動きが活発になっている。

(会長)

本日の協議には三つの柱がある。一つ目が本県の広域学習圏について、ここでは、県民カレッジ本部並びに地区センターという組織の現状、今後の方向を中心に議論していただくかと思う。二つ目の生涯学習を担う人材育成についてというところでは、平成19年度からはつらつ学びのリーダー育成事業をふまえた今後の人材育成の方向性、またこれに関連して、各団体で人材育成に努力していらっしゃる皆さん方の悩みをお話いただければと思う。それから三つ目の、学習成果が地域に還元される環境づくりについてというところでは、知の循環といった観点から、放課後子ども教室の指導者や親を学び伝える学習プログラムの普及の問題、あるいは公民館活動の活性化、受講者や研修を受けた人の学習成果の活用のあり方などを中心にお話いただくかと思う。こういう機会なので、それ以外、広く、スポーツも含めた生涯学習全体について、三つの柱が終わった後で、お話いただければと思う。

それでは、本県の広域学習圏について、富山県生涯学習団体協議会の立場からご意見をお願いしたい。

(委員)

県民学習カレッジについては、新川、砺波、高岡地区はキャンパスフェスティバルを開催し、発表の場としているが、富山地区は教育文化会館に本拠地を置いて活動していて、発表の仕方が違う。昭和63年から生涯学習団体協議会の活動が開始され、現在8,000名余りの会員数である。最も皆さんが楽しみにしているのは、生涯学習団体協議会の運営委員会で、皆さんが受講したい講座、たとえば委託教養講座、08講座、再発見講座、21世紀講座などを立ち上げて、それを受講することだ。このため、皆さんが最も関心をもっているのは、発表の場、活動をする場をほしいということである。教育文化会館の中には、研修室、集会室、ハイビジョン学習室などがあるので、そこで自分たちが学習していることを発表している。雄峰高校は3年に一度しか発表会がないので、皆さん方は毎年発表の機会があればいいのというような顔をしていらっしゃる。研修の場があり、自分たちのニーズに合った講座を開いてお互いに交流するというのが一番の楽しみであるようだ。

(会長)

生涯学習団体協議会に加盟する団体の数は164とお聞きした。それらの団体が各地区にあるわけだが、新川地区のご意見を伺いたい。

(委員)

新川地区の生涯学習団体協議会は、魚津、黒部、入善、宇奈月、朝日という5つの地区において活動している方々で組織されたものであるが、会員は徐々に高齢化し、団体数や会員数は少しずつ少なくなっている。新川地区センターでは、地区生涯学習団体協議会が中心となって開いている教養講座は、参加しやすいように、5つの地区を巡回している。新川みどり野高校の生徒と一緒に受ける特別講座の参加者が最も多いが、地区センターが交通の便の悪い場所にあるので、遠方で車のない方や高齢の方はなかなか参

加できないのが問題である。また、新川キャンパスフェスティバルという、皆さんが学習の成果を発表する場を設けているが、その参加者もやはり徐々に限られたメンバーになってきているのが現状である。もっと身近なところで、誰もが参加できる学習の場があればいいと思う。

(会長)

お話の中の特別講座は、生涯学習校に通学している現役の高校生と一般の社会人が同じ教室で勉強するという講座である。雄峰高校については、富山地区の生涯学習校にとの既定方針もあり、12月議会でも、耐震化の問題とあいまって、雄峰高校の今後についての質問もあったそうである。生涯学習校の今後の可能性や雄峰高校の生涯学習校構想、富山地区センターということなどについて、ご意見を伺いたい。

(委員)

となみ野高校で、社会人と高校生と一緒に受講している書道の授業を見学したが、地域の方々が高校生と家族のように接し、「姿勢がいいと格好いいよ。」というように教えられるので、その講座の雰囲気よくなっていった。そういう意味では、社会人が学校の中に入ることによって、学校教育以前のしつけについても言えることがあるし、高校生たちがいるので、社会人の方もいい大人になろうとしているように感じられた。そのような講座では、挨拶が断然多い。地域と学校との関わりが素晴らしいと思った。富山は、県民カレッジ本部という形が強く、高校生たちと社会人の関わりが少ないような気がする。そういう意味では、雄峰高校を使用するというのは、私も興味深いと思う。となみ野高校もそうなのだが、車でないと来られないということと駐車場の問題が気になる。

(会長)

それでは、二つ目の柱である生涯学習を担う人材育成について、婦人会の立場で、後継者の育成における悩みなど、何かヒントになるようなご意見があれば伺いたい。

(委員)

後継者ということでは多くの課題を抱えている。最大の課題は、会員の減少である。若い人の入会が少ない。理由として、フルタイムで働く女性が増えたこと、職場で責任あるポストがまかされている一方、家庭内の仕事はまだまだ女性の方に懸かっているという中で、婦人会の世話はできないということになる。また、家族形態の変化や青年団活動の弱体化などによる地域活動体験の不足により、婦人会など地域活動団体を必要と思わない。さらに、リーダーたちに昔からの活動を守ろうとしているところがあって、若い人たちになかなか受け入れてもらえない、等々が考えられる。

一方、子育てサポーターなどを養成して、子育て支援の事業を実施すると、その恩恵はフル活用される。私たちは、「いろいろなサービスをどんどん活用してください。そして、将来自分の時間が持てるようになったら、次世代の若い人たちの子育てを支援してください。地域での活動を推進してください。」と呼びかけている。このことは、生涯学習の人材育成につながるところがあると、先ほどからのお話を伺いながら思っている。

一つの試みをお話したい。平成14年、砺波市で子育てサポーター養成講座が実施された。その折、砺波市連合婦人会では、各地区婦人会から2、3人の受講を勧めた。これがきっかけで、市内全地区に子育てサポーターがいる環境を整えることができた。私の地区では、30代のお母さんを誘って2人で受講した。その人が引き金になって、そ

の後も毎年若いお母さんの受講者があり、5人の若い人に中高年の受講者を加えて、十数人のボランティアグループになった。月1回、最終金曜日の午前中に、地区内の施設で、子育て支援おてだまの活動を展開している。私は都合のつくときに顔を出すだけなのだが、若いメンバーを中心に楽しみながら、自主的にいろいろなことをやっていってほしい。このことから、最初から、若い人はこっちを向いてくれないと諦めるのではなく、まずきっかけを作り、私たちは少し引いた立場で、若い人を中心に実践するようなことを一つ二つとやってみると、後継者育成の糸口が見つかるのではないかなと思う。

(会長)

県民カレッジのはつらつ学びのリーダー育成事業も、意外に家族の介護の問題を抱えていらっしゃる方が多いことなどがあり、なかなか思ったとおりの事業として広がりを見せていないのが実情なので、今のお話も参考にさせていただきたい。

指名して恐縮だが、専修学校各種学校連合会の立場から、また、県民カレッジ友の会「雷鳥会」会長の立場から、ご意見を伺いたい。

(委員)

職芸学院という大工さんと庭師さんを養成する学校を始めて13年経つが、まさしく今話題の後継者育成というのがテーマの学校である。開校前は、多少勉強嫌いでも実技で一生懸命にやってくれたらいいかと若い世代の入学を期待していた。入学資格は18歳以上ということなのだが、高卒の若い人ばかりではなく、女性の方も随分入学されるようになり、さらに、日本列島を縦断するように様々な地域から入学希望者がおいでになって、いちばん驚いたり、いい意味での悩みでもあるわけだが、年齢が相当ばらついている。生涯学習においては、老若男女というか、年齢・性別のばらつき、混在が効果をより発揮する。そのあたりのあいまいさというものが随分大切なような気がする。

若い世代を預かってご苦労されている、一般の学校の先生方にこのようなことを言うと失礼かもしれないが、私たちのような専修学校・各種学校であると、老若男女が混在していることにおいて鮮度を保てる、更新していけるということが言えるのではないかなと思う。そして、これからも、自在に対応しながら学校を運営していくことになるのかなと思っている。

(会長)

ただ今のお話をお聴きしていて、老若男女の境目、あるいは出身都道府県など地域の境目のあいまいさを大事にすることが、生涯学習におけるその相乗効果の発揮に大切であるという面で参考になると思う。

それでは、協議事項の柱の三つ目である学習成果が地域に還元される環境づくりについて、ボーイスカウトの指導者の立場からのご意見を伺いたい。

(委員)

ボーイスカウトの構成メンバーの年齢は、下はビーバースカウトという年長の秋から、上の団委員長クラスになると、60歳代・70歳代ということで、ボーイスカウトそのものが生涯学習という捉え方で活動をされている方が多数いらっしゃる。また、指導者の確保については、長年の悩み事になっているが、なかなか難しいということがある。スカウトを経験した方の中から指導者に育つケースと、お子さんをボーイスカウト活動に入れてそのままお世話をなさるうちに指導者となるケースの二とおりある。ひと昔前であれば、子どもがボーイスカウト活動から離れても、その活動に楽しさをお感じになり残られるケースが多かったのだが、今は子どもがボーイスカウトをやめてしまうと、親

の方も離れてしまうという形になっている。そして、高校生年代まで積極的に活動してくれたスカウトも、大学進学で県外へ出てしまうと、それっきりということになるのが富山県らしい悩みだと思う。他の社会教育団体も同じような実情であるのかなと思うのだが、県外の進学先から富山に戻ってきてもう一度活動に参加するということには、現在なっていない。生涯学習の大事なところは自ら学ぶということだと思うので、こちらからあせよ、こうせよということではなく、そういう人たちに何とか活動に魅力を感じてもらったり、自ら楽しさを発見していただくような環境づくりをしていけるよう頑張ってもらいたいと思う。ところで、県民カレッジから各団体に、こういう講座ができますよという調査をされるのもいいのではないかと思います。受講者の希望が最も大事かもしれないが、たとえばボーイスカウトであれば、ロープワーク、簡単にできるハイキング、野外料理などに長けた人がいる。各団体にはそれぞれの団体にふさわしい特色あるリーダーがいるので、そういう人材を活用されるといいと思う。

(会長)

終わりの方のお話は、県民カレッジとしても大変ありがたいご意見だったと思うが、その他の団体のお世話をなさっている方々も、ボーイスカウト活動に携わっていらっしゃる、いろいろなノウハウをもった人材を活用していただければいいと思う。

生涯学習に取り組んだ人をいかに活用するかということについて、公民館連合会の立場よりご意見があれば伺いたい。

(委員)

地域社会では、まちづくり、ひとづくりのリーダーにと、団塊の世代の方々にかかなりの期待を寄せている。公民館活動でも、中心的役割を持って活動の中に入ってくださいばよいという期待をしていたが、私がかねてから、「55歳くらいになったら、勤め先での定年時の役割・役職を想定して、地域活動に片方の足だけでも着けてほしい、また、58歳くらいになったら、地域活動に軸足を置き、定年になったら、完全に地域活動に励んでほしい。」と言ってきた。現実には、定年後も働き続ける人がほとんどで、しかも、地域の絆が薄くなっている今日、ぽつんとどこそこの役所や会社で、こういう地位でこういう仕事をしていたと、いきなり来られても、ほとんどの場合、リーダーとしては受け入れてくれない。

先ほどから、皆さんの活動面でのご苦勞を伺わせていただいた。公民館は行政の出前講座を最大限に活用させていただいている。事業の予算が潤沢でないので、どこそこにもこのような良い講師がいらっしゃるとわかっても、どれだけ謝礼をしなければならないか、悩むところで、つい二の足を踏んでしまう。委員さん方もそれぞれの立場でご心配されているようなので、行政の出前講座だけでなく、民間の出前講座、要するに講師の謝礼は、菓子箱一つで済むようなものを、県民カレッジなり、他のところにも作っていただき、情報が共有できるよう、各団体に連絡していただければ大変良いのではないかと思います。

それから、県民カレッジの地区センターの話もあったが、市町村合併も一段落し、15市町村となり、県内に2郡という体制の中では、地区センター構想は、修正しながら、人口減少、超高齢化という時代に合うようにしていかなければならない。それぞれの市町村は厳しい財政環境の中で、行財政改革の流れに沿いながら、その地域のニーズに応え、生涯学習活動を盛り上げていこうということをやっているのです、二重にならないよう、広域性に加え市町村の学習を育てる等、少し切り口を入れていただく時期ではないかと考えている。

何とか家庭の教育力を向上させたいとか、地域の絆を深めたいとか、課題の解決に向

け、お互いの連携を密にして、取り組んでいきたいと思っている。

(会長)

市町村合併にふれたご発言があったので、市町村という立場から、県への要望といったことも含めて、ご意見を伺いたい。

(委員)

私の市で最も盛況なのは高齢者学級である。第1金曜日と第4金曜日の月2回実施をしているが、ほとんど皆出席で参加されている。市でいろいろな講演会等を開催しても、その高齢者学級に参加していらっしゃる方々が主に参加されていて、メンバーがだいたい同じであるようだ。それから、いろいろな講座を開催している中で、共通して問題となっているのは、講座の受講者がずっと何年も同じ講座を受講されるということがあり、たとえば、何年かその講座の内容について習熟されたら、次は自分たちで自主的にグループを作って活動していただくというようお願いをしたいが、皆さんなかなか自分からは卒業されないということである。

また、就職等で県外へ移住した学校時代の同級生が帰省すると、その同級生たちから、自分はこういう仕事をしていたからこういうことだったら地域の子どもたちに話ができるよというような話を聞くことがある。先ほどから、委員さんたちのお話にもあるように、近年の団塊の世代の退職ということから考えると、いろいろな技術や人に話せるというものを持っている人材は、多分いるのだろうと思うので、これからは、そういった人材を発掘し、どのような場で活躍していただくかということを探り出すのが大切なのだろうかと思ったりもしている。

(会長)

人材バンクというものは従来からもあるのだろうが、十分県下に浸透していない部分もあろうかと思う。

もう一度、協議事項の柱の三つ目に戻ることとし、親を学び伝える学習プログラムの普及に取り組む中核となっているのが県PTA連合会だと伺った。そのことについて、ご意見を伺いたい。

(委員)

平成19年度に私たち県PTA連合会のリーダー研修会において、親を学び伝える学習プログラムを研修することになった。このプログラムは、家庭教育委員が中心となり、一般会員の話を引き出し、そこで学んでいただくという形であるが、平成20年度は、一年間を通しての県P連の親学びの年であると位置づけ、団体の60周年記念事業の一環として、親を学び伝える学習推進委員会会長でもあった、富山大学教授の神川康子先生を招聘して講演会を開催した。また、劇団ショコラの団員の方に、このプログラムの一部を劇として演じていただくという取り組みも行なった。

その後、魚津、富山、高岡、砺波の4ブロックでそれぞれ100人前後の、各小中学校のPTA会長さん、副会長さんなどの役員を集め、このプログラムによる研修を实践した。生涯学習という観点からすると、そこで研修を受けたPTA会長さんたちが、各学校のPTAに持ち帰り、このプログラムを、一般会員である保護者の皆さんにどのように広めていくかということが今後の問題になっていくと思う。これが最も重要なことだと思うのは、今子育て中の保護者の皆さんが、このプログラムで研修することにより、他のいろいろな人の意見を聴き、自分を発見する、ああ、昔自分もこうだったな、自分自身が子どものときはこうだった、ああだったとか振り返るということである。そこか

らまた、小中学生の弟や妹である幼稚園児や保育園児の保護者の方たちに、その研修で得られたものを広めていく、そのことにより、次に、成長した子どもたちがこうやって育ててもらったというように考え、その子どもたちがまた広めていくというような生涯学習になっていけば素晴らしいと、今思っている。

来年1月24日、今まで小中学校でこのプログラムを実践してくださったモデル推進校のPTA会長さんたちに集まっていただき、神川先生を交えて、このプログラムを今後どうしていくべきかということをお話し合う予定にしている。その場で県P連としての今後の取り組みが見えてくると思う。

(会長)

今のお話の中にも、循環という形ができていくように思う。ただ今は、指導者になるべき方々を、それぞれ既に講座や研修を受けた人の中からいろいろな形で活用していく方策など、今後の使い方といったことを中心にお話いただいたわけだが、このようなことで、他にご意見があれば伺いたい。

(委員)

これまで私自身がそうであったのだが、自分の参加する集まりの中でしか講座を考えていなかったように思う。たとえば、親を学び伝える学習プログラムも、これは公民館でも、生涯学習課でも、ボーイスカウトの中でもできると思う。そのように、いろいろなところへ、お互いにつながりがあるから行けるという場所を広げていくことがこれから必要なのではないかと思う。

県民カレッジのはつらつ学びのリーダー養成講座の受講者の方とお話していたときに、「私はリーダーでもないのに、このような講座を受講することはちょっといやだ。」とか、「立場があってこの講座に来たが、どうしていいかわからない。」という言葉聞いたことがある。それを、「他の人から誘われてこの講座を受講したけれど、私も教える立場になるのだな。」とか、「講師でなく、アシスタントならできる。」とか、そういうように広げていくためには、もっとコーディネートする人がいろいろなところから出てきて、自分自身が講座を開くわけではないが、このような講座をするには、このような人に声をかけ、このような頼み方があるのではないかと、そこまで踏み込んだ企画をしていくと、もっと面白い講座ができるのではないかと。先ほどから皆さんのお話を聴いていて思った。

(委員)

親を学び伝える学習プログラムは、神川先生を中心に非常に苦勞をなされ、素晴らしいものになっていると私は思っているが、このプログラムを婦人会の「ヤングママネット輪一ク事業」に使わせていただいた。意識的に若いお母さんたちに集まっていただき、そこに私たちの年代の婦人会員も一緒に入り、5、6人のグループを作った実践だったのだが、そのときの参加者の反応が本当に良かった。若いお母さんたちは、「ここへ出てきて、今まで胸につかえていたようなものをすっきりとさせて帰ることができる。」とおっしゃった。私はそのとき、「あら、そんなことは家のお母さんにお聞きになったら、簡単に解決することではないのですか。」と言ったら、「家では聞けません。でもここへ来たら、楽に聞けました。」そのようなことがやはりあるのだ。

次の年も、今度は若いお母さんの数を倍に、私たちの年代の婦人会員の数を半分にし、全体で130人ほどでやったが、そのときも参加者の反応が良かった。プログラムはその前年のものと違ったものを使用して実践したが、そのように様々な年代の人が集まった研修も良かったと思う。PTAの会合は、ほぼ同じ年代の人、同じような問題を抱え

ている人が集まり、あのプログラムを使い実践されるわけだが、私たちの場合は、孫の世話をしている人、赤ん坊を抱えている人といろいろな年代の人たちが集まるので、意義深いものがあった。

PTAも頑張っているらっしゃると聞くので、そのあたり、他の団体ともっと交流できたら、まだまだリーダーも発見できるし、有効活用ができると思う。また私は、あのプログラムについて、これでできあがったという捉え方をしたくないと思っている。これはおかしいと思ったら、新しいプログラムと入れ替えていくような取り組みであってほしい。固定したものと捉えず、利用者自身でまた作り替えていくような、生きた取り組みであればいいと思う。

(委員)

公民館は、事業、講座等の実施だけでなく、いろいろな方々や団体等をコーディネートすることも、大変重要な役割の一つだと思う。富山県内には、公立の公民館が325館、自治(類似)公民館が約3,000館近くある。公民館活動に関わる者として、住民のニーズに応えているか、結果について、常に反省しながらやっているが、職員の資質向上にこれからはしっかり取り組んでいこうということを目指の一つの柱としている。

先日体験した二つの事例を考えてみたいと思う。一つは小学校5年生と地域の皆さんが栽培したお米でおむすびの会を開いたところ、隣に座っていた女の子は、「炭水化物を多く食べたら体が太るから。」とおむすびを一つしか食べない。向かいに坐っていた女の子は、一個と半分食べたところでいなくなったので、先生に聞いたら、「食べ過ぎで休んでいる。」とのことだった。お話を楽しみにしていたのに。もう一つは、地域の子どもに関わる関係者の情報交換会で、夜中でも、朝の4時ごろでも、親が小さい子どもをコンビニに連れて来ているのをよく見かける、との報告があり、小さいときからそのような時間帯に出かけることを、習慣付けることは将来どうなるのだろうか。社会教育以前の問題であり、家庭教育がしっかりしないとだめになるのでは。今申し上げたような家庭教育の問題を、公民館講座の中だけでは、なかなか解決できたい面もあるので、いろいろな人たちが寄り合い、知恵を出し合って地域の課題を解決していくことに貢献する、というのが公民館の考え方である。皆さんのお力添えをいただき、新しい課題にも対応していくので、お支えをお願いします。

(会長)

それぞれの立場からの貴重なご発言に感謝する。

最後に、生涯学習全般に関してお話いただくと思うが、本日まだご発言いただけない委員から一とおりが発言いただきたい。

(委員)

私は芸文協に所属しているが、過日、ある生涯学習グループのお誘いを受けた。40代から70代の幅広い年代の皆さんに、音楽一曲に振り付けをし、参加者の方々とともに楽しくダンスをして汗をかき、帰ってきた。もちろんボランティアだが、芸文協にもいろいろな分野の先生方がいらっしゃる。ボランティア精神の高い方もきっといらっしゃると思うので、そういう声かけをしていただければありがたい。そして、専門の先生のアシスタントなどを生涯学習に携わる皆さんが経験なさることも重要ではないかと思う。

私は舞踊が専門であり、現在2歳半から60代ぐらいまでの研究生と練習している。自分のポリシーとして、生涯で出会った趣味などは最後までそれをもち続けていっていただきたいというのが私の願いである。細くてもいい、途中休んでもいい、また、気が

つけば始めるというのでもいい。預っている子どもたちには、舞踊の技術のみならず、自分のわかる範囲ではあるが、舞踊をとおして心を育てることに気をつけている。一つ思うことは、たとえば、幼くても専門的に踊れる子どもたちを、年配の方たちの講座に時々招いていただくことがあれば、連れていき、一緒に踊ったりさせるといのはいかがだろうか。音楽、舞踊、絵画、書道など、いろいろな分野で専門的に学んでいる子どもたちもいるので、そのような子どもたちを皆さんの中で一緒に活動させることは、子どもにとってもいいことだと思う。ぜひ、そのようなことも考えていただきたいと思う。

(委員)

放送大学では、現在、18歳から83歳までの方が学んでいらっしゃる。一昨日から81歳の方が、修士論文のまとめに入るのだということで、エジプトのカイロへ出かけていかれた。やはり生涯学習というのは、子どもから高齢の方まで混在しないとだめだというのが私の考えである。現在、小学校は小学校、中学校は中学校というように別の場所にあり、また、高齢者の世話をする施設も別の場所にあるので、将来的にはそういうものをできるだけ近くに集める努力をしていかなければならないと思っている。

(委員)

富山大学では、今年、機構改革で生涯学習センターがなくなり、生涯学習部門というものになった。その生涯学習部門というのは、地域連携推進機構の中の一つの部門となったのであるが、センターであったときと、行なっていることは変わらない。私はその部門長ということで、この審議会に出席をさせていただいている。

本学ではオープンクラスという授業公開を、公開講座とは別に開いている。これについては、老若男女というか混在ということで、やはり同じような効果があるように思う。相当高齢の方や会社などで豊かな経験を積んでこられた方の学ぶ態度が非常に真摯なので、正規の学生に対して強い刺激となっている。一方、年配の方も、また自分は若返ったというお考えをもってお帰りになるということが見られ、そのあたりの効果は、非常に広い意味の生涯学習ということで言うと、今日の審議会での委員さん方のお話とも共通していると思う。

また本学では、地域連携ということで、富山駅前におけるサテライト講座を今年再開したが、30代の方、40代の方、さらに年配の方たちが、多いときは80人くらいだろうか、CICのビルに集まり、受講していかれる。この講座は、一年のすべての月ではないが、ほぼ毎月土曜日の日中に開いているもので、本学各学部の名物教師みたいな人に出講してもらっている。今後、どのような講座を開けばいいかなどについて、ご助言をいただければ非常に助かると思う。

協議の初めの方で他の委員さんからのご発言にもあったが、生涯学習で学んでいらっしゃる方の発表の場ということになると、大学に来て発表していただくというのも非常に良いことではないかと思う。また、中教審答申の知の循環型社会の構築では、大学等との連携という項目があるが、本学としても模索していきたいと思っており、シンポジウムか何かを開きたいと思っているので、その点でご協力いただきたい。

(会長)

富山大学の事業について、今ほど、お願いという面も含めて、機会があれば、大学にお知らせいただければと思う。

次に、民間の方の立場でのご意見を伺いたい。

(委員)

私は新聞社で、富山県内のお茶の会、民謡の会、生け花の会などの団体のお世話をさせていただいている。どの団体もメンバーが高齢化していて、後継者の育成が大変だというのが一番の課題である。そのような中で、生け花の団体だが、あるグループが小学校へ教えに行き、県全体の花展などが開催されたとき、児童の展示コーナーを設けて子どもたちの生け花を展示するなどして喜んでもらい、生け花を続けていってもらおうという試みをしている。

それから歌と踊りの北日本民謡舞踊連合会という団体が、年に4回地方で予選をして県大会を開き、様々な部門のチャンピオンを決めている。子どもの部の出場資格というのは、幼稚園から中学生まで大変幅広い年齢でくくっているが、子どもの部の参加者がここ数年の間に多くなり、主催者としては喜んでいて、そこで工夫したことがある。5年ほど前までは、予選の段階で合格の鐘と落選の鐘を鳴らしていた。すると、幼稚園児と中学生ではどだい実力の差があるから、落選の鐘が鳴ると、小さい子はベそをかいて、次からもう出るのはいやだということがあったそうである。それではあまりにも不公平というか、勿論点数を付けて県大会への出場者は決まるのだが、あるときから、どんな途中でミスった子にも鐘を3つ鳴らし、全部合格ということにしたら、初めのうちは、観客がえっというふうな表情でお聴きになったが、やがて主催者の趣旨をご理解いただき、にこにこして聴いていらっしゃるようになった。その結果、子供の出場者が増え、県大会を勝ち抜いた子どもたちが全国大会に出場し、必ず優勝したり、入賞したり、そういう成果を得て帰ってきている。これをずっと続けてほしいと工夫したことだが、一つのでこ入れになった例ということで、いろいろな機会があるごとにお話をしている。

(委員)

生涯スポーツ協議会という立場で参加させていただいているので、そのお話をしたい。この団体は平成2年に結成され、生涯スポーツを目的とし、現在39ほどの種目団体が入っており、今年11月に生涯スポーツ協議会は、体育協会の傘下となった。スポーツはどうしても体力に差が出てくるので、それぞれの種目においては、年齢別や男女別の大会というように区分けをしながら大会をもち、生涯を通じてスポーツができるように取り組んでいる。

指導者の問題では、県のリーダー講習や種目別の講習には、皆さんが本当に熱心に多数参加している。反面、お世話係やリーダー的なお世話は、特に女性の皆さんは進んで果たしてくださらないということがある。種目としての参加はできても、お世話係はやりたくないという方が多い。女性の種目には子どもがついてくるので、誰か子どもの世話をする係も必要となるが、そういう係の方がなかなか確保できない場合もある。スポーツに限らず、どこの講座でもこのような問題があるのではないかと思う。参加については、スポーツに関しても、いろいろな種目において、高齢の方が多い。また、各種目の指導者は、地域にできている総合型スポーツクラブの指導者として参加していると思う。

また、この審議会の資料11の中で生涯学習経験の有無があるが、この割合が少ないのに驚いた。スポーツの方では、なるべく人口の半数以上の皆さんはスポーツに参加していただくということで、一生懸命普及させているところである。生涯学習全体で、この割合の数字がもっと高くなればいいと思う。数値が低い原因の一つには、情報の不足があるかもしれない。私たちは女性のスポーツの会というものを開いているが、何をしても参加者が多くて困るので、締切を早くしないと満員になってしまうところが多い。だから、情報さえあれば、参加したいという方が多数おいでになるのではないかと考えている。

(委員)

私は通信制の大学に学んでおり、先ほど老若男女という話もあったが、幅広い学生と交流するスクーリングの場がある。そのような場でお互いの情報も共有できるし、自分がわからないことも年下の子からも教えてもらえる、また、年上の人からも教えてもらえるといういい面がある。学びたいときに学べる環境が重要であり、情報を共有化することや共生するということが大事ではないかと思う。先ほど参加の割合が少ないという統計資料の年齢別の数値を見ても、そのあたりがうまくリンクされていないような気がする。だから、ネットワークも含め、参加しやすい雰囲気や場所の提供があれば、もうちょっと参加率が上がるのではないかと思った。

(会長)

ご出席の委員には一とおりの発言いただいたが、何かご意見がある方はこの機会にお願いしたい。

(委員)

これからの生涯学習は、どこにでもある公民館を中心とした活動をさらに盛り上げていかなければならないと思う。その理由は、私が地区センターに勤務していたとき、「ぜひ私も講座を受講したいのだけれど、地区センターがある場所は遠くて不便なので行けない。」という声を聞いたからである。地域の公民館であれば、歩いてでも行けるところにあるから、子どもからお年寄りまでを対象に、地域のいろいろな行事がそこを中心として行なわれている。私の住んでいる地区では、自治振興会が中心となった地域のいろいろな行事や地域の問題も、公民館を中心として行なわれているので、そのようなものをさらに学習の場として具体化していけばいいのではないかと思う。

また、私は今、放課後子ども教室に少し関わっているのだが、その指導者は、公民館で行われた講座が元になってできた絵手紙やビーチバレーなどのグループにお願いしている。大々的にリーダー養成とか言われたら、「そんなことできません。」となるが、「子どもと一緒にやってみない？」と誘ったら、「じゃあやってみようか。」という返事が返ってくる。10人、20人の子どもたちを1人の指導者で教えるより、仲間が5、6人集まって、「一緒にやろう。」と言うと、子どもたちも喜んでやるので、もっと身近な地域で、どのような人でも参加しやすい公民館を中心とした活動を広めていったらよいと思う。

(会長)

公民館活動に対するエールがあったように思うが、何かご発言はないか。

(委員)

忙しい時間を割いて出席していただいている、厚生部の方をお願いしたい。高齢者の割合が益々高まる中、高齢者向けの生きがい事業、生涯学習に関する事業、健康に関わる事業等多くのメニューがある。地域の公民館へ下りる流れは教育委員会だが、任せるのではなく、参画・参加型事業を、行政全体でどんどん出していきたい。公民館は、皆さんから知恵をいただき、より活性化していきたいと考えているので、よろしく願います。

(委員)

今まで計画されたいろいろな行事は、上から計画されているので、ほとんど都市部中心となっており、農山村部の人たちは行きたくても、行けない。だから、大きな集まり

ではなく、小さなグループでできる事業から始めた方がいいのではないかと思う。

(委員)

先般、ある市町村が機構改革ということで、生涯学習課とスポーツ課を一つにするというような報道があったように思う。生涯学習課長とスポーツ課長を兼務するとか、行政側の感覚がそうになってきたのかと、少し危惧している。国も、生涯学習に関する分野の政策がトーンダウンしているのかな。

また、マスコミ等で話題に挙がるのはどうしても学校教育が中心となるので、そういう状況下では、いわゆる学校教育、生涯学習、スポーツの比重のバランスが取れているのだろうかという気がする。平成 20 年富山県教育委員会重点施策の体系を見ると、生涯学習分野のページ数が学校教育のそれと比べてかなり少なかったのが意外に思った。予算の項別内訳表でも、構成比で言うと、社会教育費、体育費が若干減となっていて、県では学校教育に力を注いでいらっしゃるのありがたいのだが、全人的な人格育成という見地からすると少しアンバランスではないかという危惧を今抱いている。

(会長)

まだまだ意見があるかと思うが、予定の時間にさしかかっている。本日の協議はこれで終了させていただきたい。

終わりになるが、本日はたくさんのご意見をいただき、感謝申し上げます。ぜひ私からお願いしたいことは、委員各位におかれては、特に各地域、各団体という立場で、この生涯学習の真の推進者、実践者という形でご活躍いただきたいということである。また、事務局におかれては、本日の各委員さんからのご意見、ご提言をぜひまた今後の事業運営の中で生かしていただきたいと思う。本日は特に、県教育委員会の中の生涯学習・文化財室だけではなく、関連の知事部局へのご意見もいくつか聞かれたように思うので、ぜひまたよろしくお願いしたい。

以上で任を終えさせていただくこととする。皆様のご協力に感謝したい。